講演　「言葉の学習を通じた日韓間の交流」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS41 号に掲載）

2007 年 1 月 10 日

梅田博之氏（麗澤大学学長）

日本と韓国との間には今まで「交流の三大ブーム」と言えるような三つの時期があり、もっとも古くは渡来人による文化の受容が進んだ古代、そして中世・近世の文禄・慶長の役／壬辰倭乱から朝鮮通信使の往来の時期、そして、三番目が「韓流」ブームに見られる現代である。

古代の交流

古代における渡来人による文化受容の密な状況にもかかわらず、朝鮮半島の言語から借用され古代日本語に入った語として跡付けられる例はテラ〈寺〉tyəl, コホリ〈郡〉kvl など意外に少ない。また、日本語と韓国語の系統関係についても類似の語例が少なく確実なことは言えない。ただ、現代韓国語が直接遡及できるのは新羅語であるが、日本語または新羅語と高句麗語の共通点を指摘して、日本語と韓国語の関係を考える上で高句麗語をミッシングリンクと考える学説もある。

両国とも漢字を導入して書写手段としたが、受容の過程で自国語を表記するための方法をそれぞれで発達させた。吏読と宣命書き、郷歌と万葉仮名、口訣と訓点、漢文訓読法など共通点も多く、朝鮮半島からの影響が考えられる。

その後、日本では漢字の草書体から平仮名が、省略体から片仮名が作られ、仮名文体・漢文体・漢文訓読体・国漢文混淆体など多様な書写スタイルが生じた。韓国では 15 世紀中葉に至り漢字とは別にハングルを創製し、漢字の使用は漢語や漢文の表記に限定され、訓読が一般化せず、漢文体とハングル体は別個に使われ、開化期に至って国漢文混淆体が生じた。

ハングルはアルファベットと同じ音素文字だが、音節単位にまとめて書く音節文字でもある。また、基本字に対して画を加えることで同じ系列の異なる発音を表す方法で作られ、音素をさらに分析した音韻素性を表す素性文字という性質も持ち、多彩な性格を持った優れた文字といえる。江戸時代の国学者が漢字伝来以前から日本に存在したと主張する「神代文字」の中には、明らかにハングルの影響を受けているものもあり、興味深い。

中世・近世韓国の日本語学習―『捷解新語』

中世・近世の文化交流においては、文禄・慶長の役／壬辰倭乱の影響が大きい。代表的な事例が、儒者姜 の指導による日本朱子学の成立と、朝鮮通信使の通事も務めた訳官康遇聖の日本語教材作成であり、いずれも日本で虜囚生活を送っている。その他、韓国語を片仮名で書きとめた日本側の従軍記や、漂流民からの聞き書きなどの交渉の記録があるほか、新井白石の『東雅』をはじめとし、江戸時代には朝鮮研究がかなり進んだ。

康遇聖は帰国後科挙の訳科に合格し、日本語教育に従事し、教科書『捷解新語』を編纂

した人物である。朝鮮王朝の外国語教育機関「司訳院」では、漢学、蒙学（モンゴル語）、女真学（満州語）とともに「倭学」として日本語が学ばれ、初期の教科書は『伊呂波』、日本の寺子屋の教材、辞典の『倭語類解』などであった。『捷解新語』は 1676 年ごろに成立したと考えられ、釜山倭館での交易の際の会話、通信使の日本往還の際の会話から成り、巻末に国尽しと候文による書簡文が収録されている。貿易や外交の実務に即した実用的な内容であり、当時の両国の交流の実態が生き生きと表れている。本書の日本語が「母語の影響による誤用が多い」とする日本の著名な研究者たちの指摘に対して、そのいくつかは当時文法的であり、またハングルの誤植によるもの、過剰訂正によるものもあるとする韓国人留学生の研究が注目される。

近世日本の韓国語学習―雨森芳洲

一方、近世日本の韓国語学習では、対馬藩の儒者雨森芳洲の功績が大きい。芳洲は 35 歳で朝鮮に渡り、3 年間釜山の倭館で語学や文化・事情などを学んだ後、対馬に戻って通訳養成や教材の整備に尽力した。芳洲が作成した教材には『全一道人』や明治初年まで使われた『交隣須知』などがある。対朝鮮外交の基本として「誠信の交わり」を常に説き、「欺かず、真心をもって交わる」ことを繰り返し主張した。

『全一道人』には、文字と発音・単語と句・文化・実用会話の四段階の教材の作成、文化の学習、文法的な境界での発音と文字の乖離への留意、早期教育や母語話者の重視、方言の差異に注意しソウル（みやこ）の言葉を学習すべきだという芳洲の語学教育の考え方が示されている。最近、東大小倉文庫所蔵の写本『諺文』が芳洲の文字と発音に関する教材に当たる、との研究が韓国の若手研究者により発表され、注目されている。また、「両国の友好関係で通訳ほど重要なものはない。言葉さえできれば通訳ができると思われているが、決してそうではない」とも述べ、通訳は相手の国の精神文化、事情、歴史などをすべて心得ていなければ勤まらないと説いている。こうした芳洲の語学教育論は、現代でもそのまま通用するものである。

国際交流・語学学習と相互理解

日韓の長い交流の歴史の中で、お互いの言葉を習おうとする真摯な努力があったことをここで強調しておきたい。言語は思考と密接な関係があり、人間は言語を手がかりに外界の事物を把握し概念化していると言える。言語こそはすべての文化の基礎であり、言葉を習うことによって相手の国の人々の考え方や文化の基礎を理解することができる。幸い、現代の韓流ブームは単にドラマ等の文化的作品を好むだけでなく、言葉を学び、隣国の人々と交流するレベルにまで深まっている。語学学習・交流と相互理解の深度には高い相関性があることは、社会言語学の研究によって立証されているところである。学術・文化の分野や一般市民レベルでの交流の拡大、そしてお互いの言語を学ぶ努力の積み重ねによって、友好と相互理解を深めていきたいと思う。

（了）